

九州北部豪雨日田市上津江ボランティア報告

理事 尾林 大生

今回の「令和2年7月豪雨」により被災した人々の身体ケアを大分県災害ボランティアセンターより依頼を受け、日田市上津江町川原自治会センターに公益社団法人大分県柔道整復師会として江崎博明会長、高橋祥三理事、尾林大生理事、江崎仁介準会員でボランティアを行った。

当日は久しぶりの晴れになりとても暑い日であった。日田市のたかはし整骨院に集合し4名で上津江に向かったが本来なら日田市中心部から1時間とかからないところなのだが道路の復旧工事により通行止めが多く熊本の大観峰経由で2時間近くかかり上津江に入った。このような災害ボランティアの際は今回のように時間に余裕を多く持つことが大事なことだと改めて痛感した。

土砂災害の被害は甚大で土砂崩れにより多くの民家が被害をうけていた、まるで爆弾が投下されたように山肌が削れていた。河川も普段見かけないような巨石が上流より流されていた。災害当日は河川を流れる巨石群の音が怖くて眠れなかったと伺った。

避難所となっている「道の駅上津江」横の川原自治会センターではダンボールの仕切りで蜜の状態を避けるように工夫されていた。

施術は簡易ベッド1台、マット1枚、バスタオルとタオル数枚、伸縮テーピング、ハサミ、マッサージゲル、湿布、コロナ感染予防としてマスク着用のもと手指消毒用アルコールを持参していった。

コンディショニング対象となったのはその避難所で避難している人と復興によって傷害をおった人に日田市上津江振興局の声掛けの元集まってもらった。

「土砂の撤去作業で身体を負傷した」や、「段ボールベットで寝ていたため椎間関節に負担がかかり起き掛けに身体を痛めた」などの負傷原因があった。

程度としては軽いが筋挫傷を伴う疾患で体の慰安よりも痛みを訴えた。柔道整復師として避難所での施術はマッサージと違い痛みにアプローチしていくのでとても有効に行うことができ、利用者にはとても喜ばれる結果となった。

毎年のように災害が起こっている現在、避難所の身体ケアを目的として柔道整復師の需要は高まっていくと考える。これからも災害がないことを祈りつつ災害が起きた時の準備は怠らないようにしていかなければいけないと実感した。

